高校阿倍野新聞

発行所
大阪市阿倍野区阪南町中一丁目30番34号
大阪府立阿倍野高校
新聞部
編集責任者　勝信一郎　正井昭夫

偶作

ジャン・コクトー

君の名を彫るがよい
やがて天までとどくほど
大きくなる木の幹に。
立木の方が大理石より得だ。
其処に彫りつけた名も
成長する。

—昭和48年度予算—

仮執行さる

本予算は成立せず！

去る十一月二日。自治会予算の仮執行案が議会で可決された。初審議以来二ケ月間に及んだ討議もこれで幕を閉じた。

各クラブとも一応仮執行を歓迎しているようだ。しかし、肝心の本予算が今だ成立せず、現執行部任期中の成立が危ぶまれている。

平沢前執行部が定員不足のため、議会に原案を提出できなかった。などの理由により大幅に遅れていた四十八年度自治会予算の執行は九月になり橘新執行部が成立したことによって新局面を迎えた。前執行部は、引き継ぎの段階で「予算の原案は九割がたできている。」と言明していた。

しかし新執行部は、前執行部がなかなかその原案を提出しなかったので、前執行部に対して懐疑的になり、独自で予算を作成することを決めた。そして文化祭・体育祭が近く、どうしても現金が必要なので予算の一部を仮執行することを決定した。

仮執行の内容は、前年度予算額の文化クラブ七割（文化祭で集中的出費が予想されるため）、体育クラブは五割で（一部のクラブ—早急に金銭を必要としないクラブ—を除く）、新執行部は、当時決算がまだできていなかったためにこの変則的な措置をとった。

この仮執行案は、四十七年度の予算をもとにしてつくられているが、最初新執行部は前執行部の原案を資料にしようとしたが、前執行部は「新執行部が、こちらの予算案を無視した時点で責任はなくなった。」と主張し、提出を拒否した。

この仮予算案は、九月十三日にクラブ連絡会の承認を得て、九月十八日に議会に提出された。

金銭の用途やまだ昨年度決算ができてないなど、多くの予算をかかえる仮執行案に議会でも批判の声があり質問が相ついだ。

翌二十日の議会では、三年生のある議員から出された『重要事項なのでクラスに持ち帰り慎重に討議すべきだ』と主張する案と『今すぐ可決せよ』とする案がたて続けに可決され混乱に陥り、次の月には議長の不信任案まで提出され否決されたものの、その後予算仮執行案の審議は事実上ストップしてしまった。

日一日とせまる文化祭に焦りの色を隠せない執行部（新執行部）は、臨時徴収金と特別会計予算（ともに文化・体育祭用）をなんとか成立させ、行事に備えた。

予算仮執行審議再会を待つ議会では、議員が無責任で大量の欠席者が続出。何度も定員を割り、流会し、予算執行は文化祭開催に間にあわなかった。

十一月三日。文化祭用に作られているため、当所の目的を失なった仮執行案の成立に批判的な議員の多い議会で、橘会長自ら自治会の窮状を訴え、承認をとった。賛成二十九、反対一、保留四。これによって七ケ月にもわたった自治会の無銭状態はようやく一完全とはいえないが一解決した。

仮執行成立後の十一月七日。橘自治会会長は新聞部の開いた記者会見に応じ、今回の予算問題についてふれ、仮執行が遅れた原因として議員の怠慢さをあげ、激しく批難し、新執行部は充分努力していると弁明した。そして今後の展望として任期内本予算成立に全力を尽すことを明らかにし、現執行部はなんら新しい問題に取り組むことができないままに任期満了となるのではないかということを示唆した。

十二月一日。執行部のメンバー（会長・副会長・書記・一年学代男・女）は、記者会見に再び応じ再度任期内予算成立に努力することを明らかとした。

年内成立が不可能となった今、任期があと一ケ月余となった新執行部が、本予算を成立できるかどうか非常に疑問である。

執行部は、任期内成立不可能説に否定的ではあるが、入試が始まる一月の議会で、三年生が大量に欠席することは必至であり、一・二年生議員だけで定数を満たせるかどうか怪しく、その公算も大きい。もし、そのような事態になれば各クラブでは活動を大きく縮少しなければならなくなりそうだ。

我々一般生徒は、自分達の金の問題にその問題に参加すべきだ。

しかし、執行部が今までに予算の遅延について公式に何の声明も説明もしていないのは腑に落ちない。いそいで事態の説明を行ない一般生徒に釈明し、かつ協力を要請することが必要だろう。

この騒動の直接の被害者となったクラブ関係者は、個人出費がかなりかさんでいる者も多く、一応仮執行を歓迎しているようだ。しかし、本予算はいつ出るかもわからず、また学校側の方針で自治会予算がかなり削減されることになるようなので不満の声が大きい。

地理研究部は、「わら半紙も値上りし、非常に困窮している。一日も早く予算を出すのが、執行部の義務だろう。O・Bにも負担してもらって、やっとまかなっている状態だ。」と怒りをぶつけていた。

七十三年度予算に関して

投稿　—旧執行部会長—

七三年度予算（以下予算と略す）は今だ決定していません。この遅れに関しまして、旧執行部の責任を明らかにすると共に、現執行部の予算執行についていささかの意見を述べたいと思います。

まず予算は本来ならば旧執行部が立てるべきものであった訳ですこの前提には七二年度決算ができていなければならなかったのですが、あいにく各クラブの領収証の提出が非常に遅れ、結局のところ決算がぴのびになっていた為、立てることができませんでした。また、執行委員会も定員不足であり、苦肉の策として、予算と決算を並行させて行なうことをフリートーキングで決定し、その線に沿って執行していたのです。

決算も後は領収書が集まり、帳尻を合わせば一応決着がつくところまで行っていましたので、骨子も簡単に立てることができた訳です。各クラブとの予算折衝も、うまく進み、予算成立まであと一歩にこぎつけたのです。

ところが、任期終了に伴う事務引き継ぎの際、「予算はひき続き旧執行部が立てる」と申し出たところ拒まれ、新執行部が立てると決まったのです。その後の話し合いにおいても「あと四日で立てることができる」と言ったのですがそれも拒まれ、全責任を新執行部に任せ、決算を最後の仕事として旧執行部は全責任を果たし、事務を終了しました。予算を立てることに関する全責任は新執行部にあり、九分通り決定しかけていた旧執行部予算原案を破棄した限りにおいて、旧執行部以上のものを作成しなければならないはずです。

〝逆立ち〟した予算

アベノ高校自治会にとって、今回の特別予算並びに仮執行を許したことは、最大の悪例を作ったことになるでしょう。

議会で長期にわたって堂々反論した議員もあったのですが、「時間がない」として議会を打ち切り慎重審議を行なわなかったのは大変残念なことです。このようなやり口は、国会において常に自民党が野党たる社会党・〝共産〟党に対し「引き伸ばしだ」と言って使う手です。これの不当性について述べる必要はないと思います。「実に論争なくして真理の発展はありえない」のです。さて、仮執行の問題点を述べましょう。仮執行＝暫定予算を特別の理由なしに行なうことは会計に混乱を招く結果になりかねません。かって吉井執行部の際、暫定予算を組みましたが、〝何にいくらいる〟と正確に調べられた上でのことでした。

ところが今回の仮予算の執行額は昨年度の五割あるいは七割といいます。本当に金を扱う仕事なのかとあきれてしまいます。一例をあげましょう。国家予算においてが、新執行部なら四十九年度はその七割の七千億円を暫定予算として支払いかねません。

一方、特別予算についてですがそもそも特別予算は本予算の不足分を補うべく組まれるものです。すなわち、本予算が立っていない限り、いくら不足しているのかがわからないのですから、算出できる訳がないのです。まさにそれをやってのけたのですから独創的とあきれるしかありません。

その上、特別予算を文化祭、体育祭用であるかのように言っていますが、本来、本予算の不足分を補うもので、たまたま今までその金がそう使われていただけなのです。

今回の特別予算＝臨時徴集は、文化祭、体育祭の実行を自己目的化し、本来の生徒間の親睦を深めることを忘れているかのようです

このように今回の予算の執行は予算を全く知らぬ者がやったような無茶苦茶なものです。旧執行部原案をけった限りは早急に予算を立てていただきたい。そうでないと、あたかも旧執行部がサボっていたように思われるので……

平沢　保人

☆　☆　☆　☆　☆

48年度予算の動き

9・10	新執行部初討議 新執行部独自で予算をたてることを決定
9・13	仮執行をクラ連承認
9・18	仮執行を執行部が承認 議会で仮執行原案初審議
9・19	議会相反する２つの案を連続に可決する。
9・20	議長副議長の不信任案提出され否決。
9・28	臨時徴集金特別会計予算議会で承認される。
11・2	予算仮執行案議会通過

来年早々に決定の予定

投稿　—現執行部会長—

私達新執行部は、予算については、これまで大変悩まされてきました。それは、旧執行部の人達が私達新執行部成立までに、四十八年度本予算を立てていなかったということです。今回の四十八年度本予算は、当然、旧執行部が立てるべきものであり、私達が立てるものではありませんでした。

引き継ぎの際にある程度はできているという答えが、ありはしましたが、どの位できているものかもわからない、あやふやな状態でまだ議会に提出もされていないものを信じるわけにはいきませんでした。それで、私達新執行部としましては、旧執行部には任せず、新執行部で自分達が納得できる予算を立てることになり、仕方なく予算に取り組みました。ところが私達がそれを決定したのは、九月十日で、同月三十日には、体育大会、次月六、七日には文化祭という私達新執行部が、フルに活動しなければならない行事が続いていました。そこで私達は、この分だと四十八年度本予算という年度予算を立てるには、あまりにも期間が短かすぎると思い、異例の方針ではありますが、緊急に仮執行案をとったのです。（九月十一日）

この案も、ただ緊急だからといって、やぶからぼうにとった策ではありません。私達は、九月十四日のクラブ連絡会に於いて、一部のクラブを除いては、ほとんどのクラブが仮執行に、支持されたと考えてとった策です。その策も、勿論、四十七年度予算という確実な資料をもとにしました。内容は簡単にいえば、文化クラブが文化祭に集中的に支出されるということで、四十七年度予算の七〇パーセントとして運動クラブ、本部は一応五〇パーセントとしたわけです。ところが、私達が必死になってとったこの策も最終的に議決されたのは、十一月二日、その間何度も議会は、ありましたが、流会になったりで、決めてもらわずじまいでした。何に原因があったかは、ここでは取り上げません。確かに異例であるので、皆さんが理解に苦しんだ点もあったでしょうが、会長として、一言、言わせていただけるなら、せめて議会には議員の皆さんが参加して欲しいと思ったことです。また、特別会計予算及び、臨時徴集金の時もなかなか承認していただけませんでした。皆さんは、ご存知のはずでしょうが、いくら執行部が勝手に決めても、結局はどの問題をとっても、自治会員である皆さんが決める問題ばかりなのです。だから皆さんに、もっと積極的に参加していただきたいのです。私達新執行部は、ほとんどが事務的である予算で終わってしまっています。

予算というものは、大変大切ではありますが、まだまだ、私達が話し合っていかなければならない問題が数多く残っています。

よりよい自治会を作り上げていくには、より多くの問題にぶつかり、対処していかなければなりません。阿倍高生を取りまく数々の問題を解決するのは、自治会員である皆さんなのです。

私達執行部として残すのは、二ケ月になってしまいました。今まで大して皆さんのお役に立てませんでしたが、最後に一つ四十八年度予算は、私達執行部の手で次に繰り越すことのないように決めたいと思っています。勿論、これも皆さんの協力あってのものです。

予定は、十二月七日のホームルームに予算の基本方針を報告して、テスト休みにクラブ折衝をします

そして、来年の最初の議会で決定してもらいたいと思います。来年になれば三年の皆さんも、いろいろと忙しくなられると思いますが、どうぞ、せめて、来年の最初の議会だけには、是非参加される様、お願いいたします。

橘　一仁

針の穴

お元気ですか？　そして今でも（針子を）愛していると言って下さいますか？　アーア、針子も早く〝水色の手紙〟を出せる身分になりたいなぁ。無理だって?!　紙不足だもんネ……??　ノート節約で数学の宿題をしない生徒が増えたとかどうとか……?!　なにしろ阿倍高生の適応能力は、すさまじいかぎりですネ。もちろん、期末テストの赤座布団も節約したでしょうネ?!　▼不足といえば、物だけじゃありません。阿倍高の中にも不足しているものがあるんですヨ。お気づきカナ？　ズバリ、諸君の行動力ナノデス！　予算編成も、記事を読んで初めて知った人もいるのでは？　えっ?!　針子ですか？　もちろん知ってましたよ毎日毎日、校内を走り回ってるもんネ！　▼ところで、二年生は修学旅行も無事終了し、思い出がまた一つ増えましたネ。先生方は、また忙しい目をなさったようですが……▼話は急変しちゃうけど家庭クラブの役員選挙がありましたネ。前役員さん達、ご苦労様でした。それにしても、顧問の先生ともども選挙前が大そう忙しかったようですネ。選挙する会員の自覚や認識が不足なところでの選挙は、相当むずかしいものですネ。自治会ですら、欠員がうまらないままですものネ。どこに根本的な問題があるのか、皆で考えなければならないのではないですか？▼家庭クラブも今に嵐の中の船みたいに大揺れしないかしら。もう大揺れしているんですか？　阿倍高の女生徒は、みんな針子みたいにおとなしい人ばかりだから、揺れていても知らん顔しているのかな？　日頃あまり身近かでないからどうしても背中向けちまいますネ。〝石油危機〟に負けない〝家庭クラブ危機〟は、もうそこまで来ているんですが……　まあ、何はともあれ、常に私たちの話題にのぼるような家庭クラブになってほしいですネ。新役員の皆様、がんばって下さい。▼とにかく、不足と節約に追い回され、危機にあえいだ一九七三年もあとわずか。年末ぐらいは気楽に過ごしたいですネ。すばらしい一九七四年を期待して——

——針子——

修学旅行終了
二班に分けて行動

カッパ橋

今年の二年の修学旅行は無事終わった。そして、来年修学旅行に行く今の一年の間でも、方針、及び行き先が決定された。しかし、我々新聞部は今回のその決定についていろいろ希望がある。ここでその諸問題を明らかにして、来年の修学旅行を有意義な、楽しいものにできたらと願う。なおこの記事を記載するに当たって、一年生の意見をアンケートするにも時間的に制限され、仕方なく一年部員の話し合いのもとで書くにいたった。

今までも信州方面の修学旅行では旅館が小さいため全学年を二つに分けて旅行していた。一昨年の信州修学旅行は一定のルートの両端から出発し、その二班が向い合って進み、中間の日に合流し、そこでフォークダンスなどの催しを全学年で行なった。

今回も高山――上高地――松本――諏訪――蓼科――小諸――軽井沢――草津――白根火山――硯川――（りんご狩り）――長野という阿倍高数年来のコースと大きくは違わないものだったが、その行程を一組から四組（後発）が五組から八組（先発）を一日ずらしで追跡するという形で行なわれた。

信州に行くというのは一年当時に九州方面にするか信州方面にするかと全員に取ったアンケート結果により信州に決定した。当初に「修学旅行委員会」なるものを設けた。そのため我々生徒の自主的な修学旅行になるのかと思っていたら、企画の大半は先生が立てられたものになった。そして委員会は事実上、しおり作り委員会となってしまった。そのためか「生徒の要望が組み込まれていない」「一方的に与えられたものだ」という不満も聞かれた。

いよいよ旅行の段になった。先発達は三日目、後発達は二日目より雲が晴れ、美しい山岳風景を見ることができた。

スケジュールは自由時間も十分あり、ゆったりとして旅行ができた。

一方、旅行中の生徒はと言うと常に観光バスに揺られているせいもあって、車中で歌を歌ったり、お菓子を食べたり、又、寝たりしていることが多かったようだ。自分達が今どの辺を走っているのかさえ知らぬ者も多かったようであった。夜中のおしゃべりだけが楽しみであって、修学旅行に対しては高い意識で望んではいなかった。また、旅行中に多くのアベックが発生し、先生方もその対策に困っておられた。宿舎は山小屋みたいな所から、ちょっとしゃれた感じのホテルまで多彩であった。食事もまあ良かったと言えよう。とにかく楽しく過ごせ、無事に帰って来られたことが何よりだった。

ただ、全学年を二つに分けなければならなかったことが残念であった。今後は全学年がみんなで修学旅行に行けるようにしたいものである。

まず、この記事記載の目的のひとつは、修学旅行の方針が我々生徒に浸透、理解されるところにある。そこで、一年主任の先生の話を最初に伝えたい。

初めに、〝修学旅行〟とは高校教育の一部である。だから、我々教師が責任をもってやるものである。また諸条件のもとで行先を見つけ出すことは困難である。

修学旅行の方針はすでに五月に決定していた。その方針とは、〝基地方式〟である。

従来の修学旅行は、観光中心であり、京都、九州などの名所めぐりといったものであったし、またハード・スケジュールに追われての強行軍であった。しかし、現在は各家庭でも旅行する機会が増している。だから、観光よりは諸事に重きを置き、そこから日常の学校生活から味わえないものを得る方が有意義である。生徒同志、話したり、ゲームをしたりして親睦を深めるなど。そこで〝行事中心〟ということに決まった。

〝基地方式〟というのは、宿泊所を二ケ所に決めるということである。つまり〝移動〟することなく、宿泊所もある程度、設備の良いところに決められる。

これらは、今までの修学旅行の結果や生徒の感想などを参考に決められたものである。

この方針を成立させる条件として、まず、諸行事のしやすい所であること。そして、金銭的、距離的に考慮された所であることなどである。その結果、〝志賀高原〟に決まった。ここならば、九州などのように夜行列車を利用するということもなく行ける距離にあるまた、宿泊する四軒のホテル（二クラスごと）のうちの一経営者が阿倍野高女卒業生であり、その人が他のホテルに交渉してくれて、四軒とも、普通一泊八、〇〇〇円（二食付）のところ、二、一〇〇円（三食付）になった。そして、〝行事中心〟と言っても、志賀なので周囲の景色は良い。

けれど、他に諸条件を満たすに適した所があれば、今からでも変えられる。

以上が先生の話の要旨である。先生は生徒が十分楽しめるという確信をもっておられる。また、夏期行事の〝神鍋〟はその方針の試みだったそうだ。神鍋でのホームルームなどの結果、先生方は、その方針が成功したと評価しておられる。去る十一月一日の学年連絡会で、各クラス会長にもその主旨を十分理解してもらい、ホテルの予約に蹈みきられた。けれど「会長からのクラスへの連絡が十分でなかったなどで、まだ生徒たちの間には浸透していないが」とも、先生は言われた。

我々新聞部一年は、生徒側として言うと、〝修学旅行〟に関して、ホームルームなどで何度でも話し合い、学年連絡会でも、先生と生徒の話し合いが必要であったと思う。また、そうしてほしかった。

我々新聞部は、こうしたことを書くにあたって、先生に説明していただき、ある程度理解し得たが、他の生徒は果たしてどれだけ旅行の基本方針、行先の決定理由を知っているだろうか。また、五月に方針が決まっていたのであれば、すぐに我々に知らせてほしかったなぜなら、我々の最も楽しい行事の一つだし、十分吟味したかったこの後、諸行事や予定表を組むことが残されているが、ホームルームなどを活発に利用したいものである。

そして、我々新聞部は、先生と生徒との〝修学旅行〟に対する根本的な考え方が違うと考える。先生方は、初めに述べたように考えておられるが、生徒は、生徒が中心になって決めるものだと考えている為である。確かに、方針もその決定理由も納得はいくが、それらが良ければ、根本的に見解が違うところから生じる不満は消えるものでない。

今回の新聞部のこの説明だけでは不十分である。一年全生徒に、修学旅行の基本方針・コース・やり方やその決定理由などを説明してほしい。他にも、先生と生徒・生徒同志の話し合いが活発になるように先生から、いろいろな機会に問題を提起してほしいと思う。

次は志賀高原？！
取組みには不満の色

アポロ・ミキ

阿倍野の街、一言で言えば〝学生の街〟であると思う。こんなに学生の多い街も珍しいだろう。一年半前にオープンした、アポロ・ビル。このビルも一時的に学生でふくれ上がる時がある。目的があって来る人も、何気なしに来る人も、一度はのぞき込んでしまう店がある。アポロ・ミキ……。レコード店である。淋しい気持ち、いやな気持ちで来ても、何んとなく楽しくなる店である。音楽がある。それだけでも楽しくなる現代、いやずっとずっと以前の若者、若者には欠く事のできない〝音楽〟がある。淋しい時悲しい時、苦しい時、空しい時音楽を聞く。それだけで心がなごみ気が晴れるだろう。とにかく、行ってみるべきだろう。アポロ・ビルの二階、真赤な入口がすぐ目に付く、それがアポロ・ミキ。

それから十二月八日から、バーゲンをやっています。直輸入盤ばかり、とても安く買える。この機会に一度も行ったことのない人は一度、遊びに行くべきだと思う。とにかく、レコードは阿倍野随一そろっている店。

アポロ・ミキより

部説

文化祭が終わってすでに二ケ月半、また来年もその頃になると文化祭が行なわれるのであろう。なぜ文化祭を開かねばならないのだろう。この質問に答えられる人は案外少ないのではないか。大部分の人は、単に十月頃には催さなくてはならない、というだけの既成概念から、それを行なっているのではないだろうか。このような考えが阿倍高文化祭を泥沼に引きずりこみマンネリ化の一途をたどらせている。そんな既成概念を打開し50年を迎えた阿倍高に新しい改革の風を吹きこもうではないか

そこで新たな改革案を打ち出してみた。まず今年の文化祭に生徒の関心が示されず、文化クラブの会場の不人気には目をおおいたくなる。それに対し一般参加のお化け屋敷や焼いも屋などでは順番を待つ行列ができたほどである。この事実を前述の理由で見のがしていては、文化祭は消極化していくばかりだ。

阿倍高文化祭に改革を！
文化ラブの優先をやめよ

みられた個々の諸問題を取りあげてみよう。最初に何よりも感じるのはその規模の小ささ、そして文化クラブと一般参加の人気の著しい不均衡であろう。文化祭は文化クラブの発表の場であるという古くからの伝統がそうさせているのかも知れないがとにかく研究発表などに対して

文化クラブの文化祭においてのあり方を論議していると文化クラブそのもののあり方にまで及んでしまいそうであるが、現実に文化クラブの存在は年ごとに薄れている。そんな文化クラブを文化祭では保護し、優先的に会場を与えている。この方法は一見良く、誰も反対する者はいないようだが、実はこの過保護が文化祭をマンネリ化、消極化させている最大の原因の一つであることに気づいてもらいたい。文化クラブの過保護こそ阿倍高文化祭の最大の敵である。ではどのようにして、それをなくすか、やはり思いきって過保護をなくすべきではないだろうか。つまり、文化クラブと一般参加の二つに分けられる今の文化祭の体制をなくし、全て一般参加という形にするわけだ。勿論文化クラブとして参加したければ、参加すれば良い。ただし今までのような甘い考えでは不可能で、会場その他の面での保護もなくなる。したがって当然そのクラブの展示にも熱がこもり、また文化クラブとしての決められた枠をはずした、ユニークな展示も可能なわけである。少なくとも今までより、優れた文化祭ができるであろう。

文化祭でのそういう文化クラブへの保護がなくなると、つぶれるクラブがでるという人もいるだろうが、そもそもそういうクラブ自体が、文化祭を消極化させているのである。だからそのような弱体クラブはつぶれて当然、その分の予算を、活発な他のクラブにまわせば良い。

この案は少々危険であり、実行後一、三年はどうであろうが、そのようなことを恐れては何もできない。

そもそも文化祭というものは生徒一人一人のやる気、つまり自主性がなければ開催不可能なはずである。しかし、今、現にその自主性を持たない生徒によって文化祭という名を借りた暇つぶし大会が行なわれている。

文化祭に活気と、生徒の自主性をもたらすために、新しい改革案を考えるべきである。

エッセイ

僕の芸術論

音楽評論家ほどいい加減な商売はないと僕は確信している。彼らこそ日よりみ主義の曲型である。例えばレッド・ツェッペリンというイギリスのロックグループの場合を例にとれば、音楽評論家達はツェッペリンをハードロックグループ、つまりやかましい音をたてて、エレキギターをかき鳴らし、独特のシャウトする絶叫型のボーカルを武器としたグループであると理論づけている。だから彼らが出した五枚のアルバムのうち、その一、二枚目のアルバムが最高だと評し、アコースティックの導入された三枚目、そしてメロトロン（ストリングスの音を造る楽器）などが導入された五枚目などはその理論に反するため、徹底的に悪評を論じている。ところがツェッペリンがアメリカ公演で爆発的人気を示し、評判となると、彼らの評価はたちまち向きをかえ、先日までの悪評どこ吹く風とほめちぎるのである。このようなことでは音楽評論家の耳を疑いたくなるのも当然である。事実その中には、人より多くレコードを聞いたとか、人より多くコンサートに行ったからというだけでそのような職業についている人がいると言うから恐ろしい。そのようなことなら僕でも音楽評論家になれるわけだ。

話をさきほどのツェッペリンにもどそう。僕に言わせると音楽評論家達の意見とは異なり、ツェッペリンは二枚目より四枚目のほうが好きだ。たしかに二枚目はハードロックに徹している。しかし、四枚目の音楽には言葉がある。四枚目のほうがはるかに僕の胸をうち、ツェッペリンとのコミュニケーションを感じるのである。ロバート・プラントの声も生きているし、ジミー・ペイジのギターも良い。特に「天国への階段」で聞けるペイジのギターは完全に僕の心をとらえてしまった。

音楽は理屈じゃない。理屈で聞くものだ。金切り声のような歌でもしわがれ声のような歌でもそこに心があれば、それが心を打てば音楽なのだ。本当の音楽なのだ。

僕の好きなロックを大人達はけぎらいしているようだ。僕は大人達にロックを理解してもらおうとは思わない。大人達にはロックの感覚がわからないんだ、として無視している。

芸術には永遠性と時代性との二つが必要だと言う。ロックは時代性という意味では卓越している。だから大人達には理解できないんだろう。またクラシックをやっている人達の中にロックはやかましいだけで芸術なんかではないと言う人がよくいる。僕はそうは思わない。事実、日本のある作曲家が、ビートルズはやかましいだけで何もない。と言ったのに対し、ニューヨークフィルハーモニーの指揮者が、ビートルズは素晴しいポール・マッカートニーこそ、二十世紀のモーツアルトだと言ったほどだ。

上品で貧旋的なものが芸術と言えるだろうか。本当の芸術とは、大衆のものであり、大衆や若者を無視したものなど芸術と言えないそういう意味ではロックだって十分に芸術と言える。

デビット＝ボラン

―家庭クラブ総会―
新役員決まる！

去る十一月十七日、午後十二時四十五分より家庭クラブ秋季総会が催された。内容は、恒例の開会の辞、成人会長（校長）あいさつ顧問あいさつと、会則改正案審議次期役員選出。校長先生からは、長い歴史のある大組織のこのクラブをより大きく成長させてもらいたいと激励の言葉を頂き、また顧問の小林先生からは、前期各役員への賞讃と、家庭クラブの将来、クラブ内での連帯感などについてのお話があった。

ここで、後期役員を発表しよう

- 会長――田辺真樹
- 副会長――田上敬子
- 書記――坪井美稚子　前畠君江
- 会計――川人弓子　久保見幸子

立候補者は、生徒会役員選出と同じく一年生が多く、三人も立候補したクラスがあった。しかし、ここで一つ問題点としてあげられることは、彼女達が立候補するまでの過程である。家庭科の時間には先生から勧められる。休み時間には、ホームルームまで前役員が来て一生懸命勧誘される。結局強制的というか、どうしても立候補しなければならない状態でいやいや候補となった人も中にはいる。

その理由は、家庭クラブが、我々の中に足をおろしていないからで、具体的に一学期は何をしたのか、二学期の計画はどうなっているのか等の根本的なことでさえ会員に知られていないゆえである。役員の人たちはプリントを配布してそれで満足しているかも知れない。だが、受け取った会員たち、ほとんどが〝読まずじまい〟それが実態である。だから、立ち合い演説でも、立候補者から、「家庭クラブが現在の状態では、それが一体何であるのかすらよくわからない。」「生徒の意見が無視されている。だから皆クラブに興味をひかれないのだ。また、「今日の総会にも義務で出席しているんだ」などの相当厳しく実態を突いた内容があったのであろう。真の家庭クラブの意義、必要性など、生徒に理理されていないことがたくさんあるようだ。

この総会で、会則も改正されたことであるし、これを機会に、これらの諸問題が、一日も早く解決され、生徒と親密な家庭クラブ、皆が望むそれの誕生への思いを新役員の人々に託したい。それと共に私たち家庭クラブ会員も我々自身の役員ということを自覚し、協力して、明るく活発な家庭クラブを作り上げよう。

編輯後記

一九七三年もあと七日を残すのみとなりました。二学期も無事に終了し、ホッとしていらっしゃることでしょう。我々新聞部も、この新聞を出し終えて一息ついたところです。一年生六人が中心になって作った最初のものなので、ずいぶん番狂わせが起こり、ぎりぎりまで騒ぎ回っていました。

さて、第一七七号はいかがでしたか？　予算関係、修学旅行など学校や自治会側の事件を主に取り上げました。これを機会に、より一層、生徒と自治会の結びつきが深まればと思っています。原稿関係の先生方、自治会執行部の方々ご協力ありがとうございました。インフレのための紙不足で、新聞紙代が極度に値上がりして、寒い部屋で少ない予算に頭を悩ましている今日この頃であります。